

月と偶然性と科学

浅海重夫

アメリカのマリーナ9号が撮った火星の2つの衛星の写真を見た。大きなクレーターをもつ異様な形のフォボスは、直径わずか20kmの岩くずのような天体で、ダイモスはさらにその半分ぐらいだという。そこでよく云われるのは、わが地球がガラにもなく大きな衛星(月)をもっていることで、その上、視直径が太陽とほとんど同じという偶然性にめぐり合わせているので、皆既食と金環食が同じ位の頻度で出現することになる。ところでフォボスは火星の周りを至近距離で公転しているために、計算によると火星から見てこれまた太陽とほとんど同じ大きさに見える^{*}。自然界にはよく偶然があるものだと思う。わが地球の月がたまたま自転と公転の周期を同じくしているのもう一つの偶然で、日本人には満月にウサギが餅をついているイメージが固着したが、もし月の自転速度が別であつたら、次の満月はタヌキが腹つづみをりつ頃だとか、そろそろウサギがタヌキを追いかける頃だとか、色々な観察がなされて、地球の住人の情操は一そり豊かで複雑なものになったかもしれない。

地球上に生命が発生したのは偶然のできごとだとも云われるが、一方にはこれだけ多くの好条件がそなわった地球上に、少くとも地球型の生物が生ずるのは必然だという見方も成立つという。さらに地球に現存する生物がいわゆる地球型(水と炭素化合物からなる生物)であるのも偶然ではなく、太陽系以外の恒星に所属して生命の可能性をもつ多数の惑星においても、発生する生物はやはり地球型のものしかなさそうだという説もある。^{*}偶然の現象に何か因果関係をこじつけて説明しようとするのは無意味であり、必然性にもとづく現象をとらえてその因果を解明するのが科学であるが、偶然と必然の見きわめを適確につけるのが難しい場合もある。

星占いというのが一部の人々に信じられている。また日常生活で体験する奇異な現象を霊媒などで説明しようとする人もある。非科学的な思考をする人たちに限って、偶然にすぎないこと、何等の因果関係のない現象に、説明をつけたがる。因果関係をつかみ得ない現象に、人は神秘性を感じ

^{*} これまでフォボスの半径は6kmとされていたが、今回の観測では長径20km余りと発表されている。後者の値によって計算した場合のこと。

^{**}江上不二夫：生命を探る(岩波新書)

やすく、時は恐怖となり、心の不安を解消するために星占術や霊媒術が生まれたのであろう。これらの術は科学ではないし、その見きわめはまちがっていないと思う。

かつて天動説が絶対のものでされていた時代に、地球から見る惑星の奇妙な運行を説明するために、やたらに複雑な惑星軌道を考え出した神学的科学者があった。自分たちの住む地球を神の作った特別なものとしたい故に、宇宙における偶然的存在である地球をこじつけて説明した例であるが、ひところ世界文明をリードしていた西欧の中心点がドーバー海峡あたりにあるのは単なる偶然なのに、当時のイギリスやフランスが世界の中心として君臨する必然性をもつかのように説いたのも、同じたぐいの非科学的思考であった。

世の中には宇宙空間もふくめて、たしかに不思議な偶然的事象がある。しかしその多くは全くそれ以上説明の必要のない偶然そのもので、ただ珍しいこともあるものだと感心していればすむことだ。神秘性を感ずる必要はないし、悪用してでっちあげの説明をするのは非科学者のすることである。

スウェーデン語

式 正 英

「いまスウェーデン語の勉強しています」というと、いろんな返事や問いが戻ってくる。「スウェーデンでは英語やドイツ語が通じる筈だ。いゝ歳をしてわざわざ語学の勉強でもあるまいに。」という意見が多い。

終戦後、今村学郎氏（地形学者、元東京文理科大学助教授）が、G. H. Q.（連合軍総司令部）に勤めておられた頃、司令部の一米人と「英・独・仏・瑞（ズイ）」の語学で競争しあって面白かったと語っておられた。辻村太郎先生（地形学者、東京大学名誉教授）は数カ国語に堪能で、その中には勿論瑞（ズイ）も含まれている。およそ地理学に携わるもの瑞典（スウェーデン）語ぐらいの心得はあって然るべきなのだろうと学生の頃から考えていた。人口780万の小国、ストックホルム、ウプサラ、ヨーテボリー、ルンド、ウーミオなど大学の数は10指にみたないが、ド・イエール、アールマン、ウルストレーム等世界的地理学者を数多輩出している。ジオグラフィスカ・アナラーは地理学の専門誌としては権威を持っており、ウプサラ大学の自然地理学教室を訪ずれた日本人は、必ずその設備の良さにうならされている。